

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：中山匡美

この課程博士学位請求論文の審査は、(主査) 寺澤盾、(副査) 山本史郎、上田博人 (以上、東京大学大学院総合文化研究科)、斎藤兆史 (東京大学大学院教育学研究科)、田辺春美 (成蹊大学) の5名によって行われた。公開審査は平成27年3月12日 (木) 16時から18時まで、18号館コラボレーションルーム2において行なわれた。論文題目は **Grammatical Variation of Pronouns in Nineteenth-Century English Novels (19世紀イギリス小説における代名詞の文法的変異)** である。以下、審査結果の要旨を報告する。

中山匡美氏の博士論文は、19世紀のイギリス小説に見られる代名詞の文法的変異がいかなる言語内的・外的要因と関連しているかをさまざまな視点から巨視的、微視的に論述したものである。さらに、この時代の代名詞の用法が規範主義からどのような影響を受けていたかという問題も考察している。資料として用いられた後期近代英語のテキストは、19世紀を代表する小説20作品 (約240万語) である。

本論文は7章で構成されている。第1章の序論では、研究目的、先行研究、分析方法について述べられている。2章から6章では、19世紀の代名詞の文法的変異について具体的な考察と分析を行っている。

第2章は非標準的な人称代名詞の用法を考察する。そこでは、二人称単数 *thou* の使用が話し手と聞き手の「力関係」と「感情」によって決定づけられていることなどが示される。

第3章では、*It is I/me* 構文や *than, as, but, except, save* に続く代名詞などにおける格の選択の問題が取りあげられる。たとえば、*It is I/me* や *I!/Me!* は現代英語では目的格が一般的であるが、19世紀の小説では、規範文法家が推奨する主格が目的格をはるかに上回っているという。一方、目的格はほとんどが話し言葉に限られており、社会言語学的には下層階級の人物の用法であることが示される。

第4章は指示代名詞 *those* に代わる *them* や *they* の非標準的用法を考察する。指示代名詞 *them* を *those* の代わりに用いる形容詞的用法 (*them books*) は、非標準的用法として地域方言や社会方言に見られる。関係詞が後続する *those + rel.* に代わる *they + rel.* と *them + rel.* は古風な文語的用法として当時は標準的とみなされるものもあったことが示された。

第5章は目的語として用いられる *whom/who* と人間以外の先行詞に用いる *of which/whose* を扱う。*whom* と *who* の分布は、現代英語と大きく異なり規範文法で定める *whom* が圧倒的高頻度で用いられていることが示され、作家の性別では女性が *who* を多く用いる傾向が指摘された。所有の関係代名詞 *whose* は現代英語では、人だけでなく無生物の先行詞にも広く用いられるが、19世紀では人間以外の先行詞に対して *of which* の頻度が *whose* のそれを若干上回っていたことが明らかになった。作家の性別で

は、女性作家は19世紀初期から人間以外の先行詞に対して *whose* を *of which* より頻繁に用いていた一方、男性作家は、はじめは人間以外の先行詞に対して *of which* を用いていたがしだいに *whose* を受け入れていったと論じている。

第6章は不定代名詞の数の一致について論じている。不定代名詞の動詞呼応は、平均90%以上が文法的な単数呼応であるが、(n)*either* は単数・複数ともあり、*none*, *any* は複数呼応であったことが示された。不定代名詞の代名詞との一致では、singular '*they*' の選択に、作家の性別が大きく関与していると論じられている。男性作家が文法的な単数呼応を選ぶのに対し、女性作家は意味的な複数呼応を選ぶ傾向があったことも明らかにされた。

最終章の7章では、2章から6章で得られた結果がまとめられ、さまざまな要因がどのように文法的変異に作用しているか論じられている。さらに、格の選択、指示代名詞の用法、関係代名詞 *whom/who* の選択に関しては、それぞれほぼ90%かそれ以上の割合で規範文法に沿った用い方をしていることが示された。他方、19世紀の時点では文法家が徹底できていなかった *of which/whose* の使い分けと不定代名詞の数の一致の問題は、男性作家のほうがより規範文法に忠実であり、女性作家のほうは学術的な言い方よりもより自然な言い方を好んでいたことが明らかにされた。

以上が本論文の概要であるが、19世紀の小説から広範な英語資料を収集し、それを質的・量的な観点から綿密に分析し、代名詞の変異について年代、社会層、性、年齢などの言語外的な要因と、統語、形態、音韻、文体、語用という言語内的な要因について綿密かつ丁寧に議論している点がいずれの審査委員によっても高く評価された。19世紀の小説における代名詞の用法に関して、膨大なデータが得られたことで、その結果を同時代の別ジャンルのコーパスと比較したり、他の時代のコーパスと比較したりすることが容易になり、将来の研究への発展性も極めて高いとの意見があった。また、19世紀の代名詞用法への規範文法の影響に関しては、女性作家の方が規範から逸脱した革新的な代名詞用法を取り入れているなど、興味深い新発見があったことも評価された。

一方で、本論文には以下のような問題点も指摘された。まず、小説のテキストを用いた研究であるが、小説としての読解がやや弱く小説としての構造分析が十分でないという論評があった。また、本論文では小説にあらわれる異綴りが当時の発音の変異形を反映しているという前提に立っているが、小説にみられる代名詞の異綴りは作家の恣意的な習慣で実際の発音を表しているとは言えないという指摘もあった。データ処理法についても、相対頻度が示されていない表があり、統計手法が初歩的であるという批判があった。この点に関しては今後相関分析、分散分析、多変量解析、統計的検定など各種の方法を参照することが必要であるとのアドバイスもあった。

こうした欠点は見られるものの、中山氏の論文は、19世紀イギリス小説における文法的変異に関するこれまでにない詳細な研究であり、将来へのさまざまな発展の可能性

を秘めており，全体として学術的な価値が高く，この分野における優れた研究成果として十分に評価に値するものである。したがって，本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。

最終試験の結果の要旨

論文提出者氏名 中山匡美

本審査委員会は、平成27年3月12日に論文提出者に対し、学位請求論文の内容及び専攻分野に関する学識について口頭による試験を行った。

その結果、論文提出者は博士（学術）の学位を受けるにふさわしい十分な学識を有するものと認め、審査委員全員により合格と判定した。